「電話の声」の変容
―推理小説における四号電話機の影響―

黒田翔大

キーワード：推理小説、電話、声、四号電話機、松本清張

はじめに

戦後の電話研究は一九七〇年代以降に焦点が当てられる傾向がある。[1] それは、家庭における電話の普及率が飛躍的に増加し、人々にとって電話がより日常的なものとなっていくからである。しかし、電話が声のメディアであることに留意すると、電話により再現される「電話の声」というのも重要な要素であり、それは一九五〇年代に大きく変容している。

「電話の声」の変容に関して、電話事業史では四号電話機の登場は画期的であったとされている。四号電話機は一九五〇年に正式採用され一九五六年に東京での設置が完了したが、[2] 音声の明瞭度が飛躍的に向上しており、[3] 従来の電話機は「いわゆる〝電話声〟という、鼻にかかった、しばらくは相手がだれであるかわからない」[4] と言われるようになる程であった。

この四号電話機による人々への影響に関して『東京の電話』下巻において「都民の電話での話しかた、聞きかたを、まったく更新してしまった」[5] と指摘されている。しかし、電話研究そのものの蓄積の不足もあり、[6] 四号電話機による具体的な影響に関する記述は不十分である。そもそも電話は声のメディアであるため、記録として残りにくく研究対象とする難しさがある。[7] そこで当時の文脈の中で電話がどのように使われているのかが文字で描かれている小説を有効な分析対象だと考え、その中でも推理小説を本稿では扱っていく。

推理小説にとって電話は非常に相性の良い小道具であり頻繁に登場する。[8] 犯人が正体を隠したまま連絡を行うなど非常に便利な道具のため、推理小説において電話の登場する場面は多いのである。ただし、電話の描写はストーリーの展開の中での整合性が問題となる場合がある。

もし推理小説において電話の用いられ方に問題があれば、石原千秋が東野圭吾『容疑者Xの献身』に関して述べているように「九十九パーセント作者のミスだと思う」[9]ということになりかねない。技術の進歩や新たな機器の扱いに対して、作家は細心の注意を払わなければならない。[10]つまり、推理小説における電話の描写は同時代性を反映しているということになる。

本稿では、「電話の声」に焦点を当てて、犯人による電話の用いられ方を中心に分析を行っていく。まず、四号電話機普及前後の推理小説における描写を比較することで変化を明示し、その変化は現実の事件においても見受けられることを確認する。そして、その変遷の中での松本清張『声』の位置付けを示す。それによって、四号電話機の普及に伴う「電話の声」の変容による人々への影響の一端を明らかにすることを目的とする。

一　四号電話機普及以前の推理小説

推理小説において電話の登場が一般的になる以前は、犯人による連絡手段は手紙や電報といったものを挙げることができる。手紙や電報であれば、電話と同様に姿を現すことなく連絡をすることが可能である。例えば、黒岩涙香『幽霊塔』（一八九九―一九〇〇）では次のような場面がある。

余「エ、怪我とは誰の」叔父「お前のよ」余「エ、私が怪我したなどとはそれは何かの間違いでしょう。この通り無事ですが」叔父「無事なら何より結構だが、ハテな、誰の悪戯だろう、まずこの電信を見よ」と云って一通の電信を差し出した、馬車の燈火に照らして読むと「ドウクロウ、オオケガ、スグキタレ、イナカホテルヘ」とあり「叔父さん誰かが貴方を欺いて誘き寄せたのですよ、跡方も無い事です、しかしこのような悪戯者があっては不安心です、貴方はすぐに宿屋へお出でなさい、私はすぐに電信局へ行き、どのような奴がこの電信を依頼したか聞いてから帰ります[11]」

余が大怪我をしたという偽電報が叔父のもとへ届いていた。余はすぐに電信局へ向かうが、依頼主は小僧を雇って間接的に電報を送っており、頼信紙の文字も「露見を防ぐためわざと拙く書いたのかもしらぬ」ものであった。このように、手紙や電報であれば、犯人は正体を隠したまま連絡することができ、受け手にとっては送り手が誰であるか分からないという不気味さや恐怖心を抱かせる

ことになる。

このような相手が分からないことによる不気味さや恐怖心といったものが、四号電話機普及以前の推理小説における犯人による電話の描写には多く見ることができる。小酒井不木『深夜の電話』（一九二八）では、冒頭において少年科学探偵塚原俊夫のもとに犯人から電話が掛かってくる。

「君は誰だ？」

「俺か、俺は、君たちのいわゆる犯人なんだ。東京じゅうの人が誰でも知っている、その有名な人を殺した犯人だよ。分かったかい。だから、この俺を捕まえれば、君は世界一の名探偵になれるということだ。だが、おそらく、君の腕じゃ俺を捕まえることはむずかしかろう」[12]

犯人は俊夫を挑発するために電話を掛けている。犯人の候補として以前の事件で関わった山本信義の可能性を考えるが、俊夫は「さあ、山本の声をよく覚えていないし、それに電話の声は普通の声と変わるものだからはっきりしたことは分かりません」という。犯人が俊夫のもとに電話を掛けた際は声を変えることなく普通の声で喋っていたが、俊夫は「電話の声」と実際の声は異なるのではっきりとしたことはいえないと述べる。

江戸川乱歩『悪魔の紋章』（一九三七）では、川手庄太郎のもとに脅迫電話が掛かってくる。

脅迫は必ずしも手紙ばかりではなかった。ある時は電話口にえたいのしれぬ声が響いた。

「川手君、久しぶりだなあ、僕の声がわかるかね、ホホホホホホ。君には美しい娘さんが二人あるねえ。僕はね、まず手はじめに、その娘さんの方から片づけることにきめているんだよ。ホホホホホホ」

非常にやさしい鼻声であった。おそらく電話口で鼻をおさえて物をいっていたのであろう。彼は一とこと喋るたびに、ホホホホホホと女のように笑ったが、その奇妙な笑い声が川手氏を心から震え上がらせてしまった。[13]

明智小五郎と並び称される探偵である宗像隆一郎博士が、川手家を襲う事件に挑むことになる。そして、宗像博士が事件を解決したように見えるものの、最後に明智が登場し宗像博士が真犯人だということを暴露する。真相は宗像博士が川手に脅迫電話を掛けていたのである。

しかし、川手は探偵を装う宗像博士と一緒に行動をするものの、宗像博士が犯人であることには気付くことができなかった。

また同じく乱歩の作品である『暗黒星』（一九三九）では、探偵の明智が伊志田一郎から依頼を受け、事件に挑むことになる。明智は一郎と一緒に行動をすることが多いが、実は一郎が犯人であることにはなかなか気付くことができない。一郎が犯人として明智に電話を掛けるのが次の場面である。

「お前は明智だね。ウフフフフ、間に合わなくて気の毒だったねえ。オイ、明智、よくこの声を聞いておくがいい。わかるかい、この声が。ウフフフフフ」

悪魔の声だ。一郎を殺害した犯人の声だ。犯人が名探偵を嘲笑しているのだ。だが、それはなんという不思議な音調であったろう。男とも女とも、老人とも若者とも、まったく見当のつかぬ調子はずれの声であった。まるで九官鳥が人声をまねしているような妙に間の抜けた感じなのだ。[14]

一郎は明智に対して、「よくこの声を聞いておくがいい」というように挑発をする。犯人である一郎から電話を掛けているということは、声から露見しないように意識して声を発しているということは当然考えられる。「電話の声」というのは曖昧なものであり、声だけでその人を判断することは難しい。明智は推理を披露する際に「電話の声なんか、少しお芝居があれば、どんなまねだってできる」と指摘するように、「電話の声」は容易に変えることが可能であり、声だけではその人物を特定することは困難なのである。

北林透馬『電話の声』（一九五一）は、既に四号電話機は登場している時期だが、普及が進む以前でありその描写はこれまで挙げてきたものと同質である。冒頭において警察に「あッ……私は殺されます（中略）救けて……救けて……」という電話が掛かり、現場に駆け付けると沢見せん子が殺害されていた。「私は殺されます」という電話は殺害された沢見が掛けたものだということを警察は疑うことをしなかったが、実は犯人の小栗麻利子によるものだった。そのことに気付いたのは藤田博士であった。

……私は指令室であの電話を傍受した松井巡査に、もう一度当時のことを、精密に思い出させてみたの

です。何しろ珍らしい電話だったから、記憶はわりにハッキリしている。やっと思い出したことは、あの電話の途中で、ちょっと言葉が切れた時、何か微かに音楽が……西洋音楽のようなものが聞えた、と言うんですよ。（中略）……一時三十分、丁度『キャスバ』でアラビア音楽がひどく音高く鳴り出す時だ。あなたは階段横のボックスからあの電話をかけた。開演中だから誰も廊下には居ない筈だが、それでも切迫した悲鳴も人に聞かれるのは工合が悪いと思ったから、言葉の途中に、ちょっとボックスの扉を開いて、あたりをうかがってみた。音楽はその時聞えたんだ。[15]

麻利子は沢見を装って警察に電話を掛けていたが、藤田博士によってそれが暴かれるのは声自体のせいではない。電話において麻利子の声だけではなく、映画『キャスバ』のアラビア音楽も伝わっていたからである。警察に掛かってきた電話が、麻利子によるものだと露見したのは、声ではなく周囲の音楽に理由があったのである。

以上のように、四号電話機普及以前の推理小説においては犯人の「電話の声」は謎で正体不明として扱われることが多い。それによって、犯人に対する不気味さや恐怖心といったものが惹起されるのであり、犯人の「電話の声」自体が犯人を特定する手掛かりになるということは少ないのである。

二　四号電話機普及以後の推理小説

前節では四号電話機普及以前の推理小説について確認してきたが、普及以後の推理小説に目を向けるとそこには明らかな違いがある。

横溝正史『病院坂の首縊りの家』（一九七五―一九七七）では、金田一耕助が最後に扱った事件であるが、一九七三年の事件において法眼慈が息子の哲也を陥れるために掛けた電話は次のようなものである。

四月十二日の晩、哲也が三栄日曜大工センターの現場にいあわせたのは、その日の午後かれのところへ電話がかかってきたからだそうである。今夜の七時半頃これこれこういう場所へいってみろ。おまえのおふくろの若き日の行状が、もっと詳しくわかるだろう。電話の相手はいっぽう的にそれだけいうと電話を切ってしまった。それはいったんテープにとって、そのテープをいろいろ細工したような声だったという。[16]

このように、「電話の声」に対して巧妙に細工を施している。「電話の声」から露見しないように、犯人は意識して電話を使用しているのである。

西村京太郎『消えた巨人軍』（一九七六）では、入江高具ら犯行グループは巨人軍を誘拐し、球団社長である青木に五億円を要求する。

「ちょっと待ってくれ」

青木は、相手を待たせ、その間に、隣の部屋からテープレコーダーを持ち出して来て、アダプターで電話機に接続した。録音スイッチを押してから、

「もう一度聞くが、君たちが、うちの選手を誘拐したという証拠はあるのかね？」[17]

青木は、犯人の「電話の声」が手掛かりになると考え、電話に録音機を設置する。しかし、犯人は「そんなものは、何の役にも立たないぜ」という。録音されることは想定済みで、犯行グループの中で表立って行動しない人物に電話を掛けさせることで露見しないようにしているのである。

また、入江が巨人軍を誘拐するための誘導として、長嶋監督に田島広報課長を装って電話を掛けている。

「田島広報課長の声色を使ったのは片平か？」

「いや。わしや。こうみえても、人の声を真似るのは得意なんや。それに、新幹線の電話というのは無線電話やから、別人のように聞こえるから、多少、違っていても、そのつもりで聞けば、先入主があるから、田島広報課長に聞こえるもんや。[18]

入江は偽電話を掛ける際に、有線電話（固定電話）より声の再現性が劣る無線電話[19]を使用している。また、長嶋監督はナイトゲーム終了後で疲労している状態である。このように、犯人は電話を掛ける際に作戦が成功するように様々な策略を立てているのである。

泡坂妻夫『ダイヤル7』（一九七九）では、警察官である塚谷宰治は暴力団撲滅のために、組長の北浦進也を殺害する。

「組長は電話をすぐ二階の自分の居間に切り替えたわ。でも、組長は用心深い人だから、電話に出るときは、いつも録音する習慣がある。もしかすると、その声が残っているかもしれないわ」

これは思いがけない情報でした。電話の内容は事件の解決につながる可能性もある。すぐ現場の鑑識

に連絡しました。高子の言うとおり、二階の電話機には、確かに録音機がセットされていました。北浦らしい周到さです。けれども、肝心のカセットテープは、機械かと取り外されていたのです。犯人は北浦を上廻る用心深さです。[20]

塚谷は北浦と会うために電話を掛けている。そのため、北浦殺害後に自分の声が録音されているテープを証拠にならないように持ち帰るのである。

連城三紀彦『過去からの声』（一九八一）では、刑事の岩本道夫は自分の子どもを誘拐されたため、山藤家の子どもを誘拐し、山藤家に脅迫電話を掛け身代金を支払わせる。

そう、あなたはそんな嘘でたえず家に電話を入れ、犯人Aからの連絡がなかったか奥さんに問い合せ、連絡があった際はそのままを、山藤夫妻に連絡したのです。直接山藤家に電話を入れられなかったのは逆探知を恐れるというより自分の声を聞かれたくなかったためだし、土曜日の新宿駅での受け渡しの際、既に間に合うはずのない三時という時刻を指定してきたのも、あの時に限って岩さんはこっそり電話をかける機会をつくれなかったからでしょう。[21]

岩本は「逆探知を恐れるというより自分の声を聞かれたくなかったため」、山藤家に直接的に電話を掛けるのではなく、山藤家の周辺の人物に脅迫電話を掛けるという間接的な手段を講じた。

また同じく連城の作品である『夜よ鼠たちのために』（一九八二）では、伊原貞夫が妻の誤診をした横住忠雄らを殺害するために電話で呼び出す。

復讐計画は完璧だった。俺には誰にも気付かれない隠れ場所がある。俺が復讐を完了するまで、警察は俺の潜む場所を絶対に発見できないだろう。（中略）

やっとその機会が来た。俺は路地裏の闇から姿を現わし、商店街に出て角の電話ボックスに入る。凍りつくほどの寒い夜が、この街の人々の生活をシャッターの裏に閉じ込め、人影を一掃している。（中略）

誰にも見られる心配はないのに俺はコートの襟をたて顔を埋める。腕時計でもう一度時刻を確かめ、送話口をハンカチで覆い、手袋をしたままダイヤルを回す。ジー、ジーとダイヤルの回る音が奴らの一

人の生命を秒刻みに削っていく。[22]

「送話口をハンカチで覆い」とあるように、伊原は電話を掛ける際に声に細工している。標的である横住は電話相手が伊原であることを他の人に決して言うことができない事情があり、また警察は犯人を津村庄一だと考えざるを得ない状況を作り出しているため、「電話の声」から正体が露見するのは問題ではない。しかし、横住に電話を取り次いでもらう相手に対しては、「電話の声」に細工を施す必要がある。

以上のように、四号電話機普及以後の推理小説では犯人は「電話の声」から特定され得る危険性を認知して電話を使用しているということが伺える。「電話の声」が犯人を特定する手掛かりとなり得るので、それを考慮した電話の描写が求められることになるのである。

三　「電話の声」が注目された事件

四号電話機普及以前と以後では、推理小説における犯人の「電話の声」に対する扱いに明らかな差異があることが伺えるが、実際に一九五八年に犯人の手掛かりとして「電話の声」が大きく注目される事件が発生している。

小松川高校事件において犯人の「電話の声」が注目されたのだが、それは犯人からの電話を録音していたからであり、それを重要な捜査資料として用いたからである。

小松川高校の太田芳江さん殺しにつき小松川署の捜査本部では読売新聞に前後十回かかってきた怪電話のうち、とくに二十八日朝七時三十四分から二十九分間にわたり読売新聞社会部記者と一問一答を行った電話を重視、同日午後三時から一時間にわたり読売新聞社で寺本捜査一課長、日出鑑識課長ら七人が同時録音したテープレコーダーを聞いた結果、この声の主を真犯人と断定、証拠資料として本部にもちかえるとともに各放送局に再録を流し〝この声に聞き覚えのある人は捜査本部まで知らせるよう〟都民に協力を呼びかけることになった。きょう二十九日午後から各放送局ニュース関係の時間に放送される予定。[23]

録音した犯人の「電話の声」を放送することによって、捜査の手掛かりを得ようとした。最終的に李が犯人であると決定づける根拠は明瞭ではないが、[24]読売新聞では「録音の声、投票でわかる」と題された次の記事が掲載された。

検挙の糸口は、犯人の声の録音を同校生徒、職員に聞かせ無記名投票で調べたところ李の声に似ているという証言があり、また同人が文学書多数を図書館から盗んで小岩署に捕まったこともあるので、李のアリバイや実行の身辺調査を行った結果、犯人と断定したもの。[25]

小松川高校で録音された二九分間の犯人の声を聞かせ、犯人について心当たりのある者を無記名で記入させて投票したという説が流布した。いずれにせよ、小松川高校事件では、人々にとって犯人の「電話の声」が大きな注目を浴びていたことには違いない。

そして、一九六三年の吉展ちゃん誘拐殺人事件では、犯人である小原保の「電話の声」が唯一の物証であり、テレビやラジオに情報提供のために流し国民的関心を集めた。この事件を扱ったノンフィクション小説の本田靖春『誘拐』（一九七七）があるが、小原保の弟である満は警察に次のようにいう。

居合わせた杉本勝正警部補が、男を刑事室に招き入れて、ソノシートをきかせたところ、終始、押し黙って耳を傾けていた彼は、しだいに深刻な表情をつくり、終ると同時に、思わず漏れたといった感じで、短い言葉を吐いた。

「似ている」

その語調には、切実な響きがこめられていた。[26]

満は犯人の声が兄の小原保に「似ている」と感じたため警察にそのことを話す。他の兄弟も「そういえば似ているわね」、「おれも、似てるとは思うんだけど」という印象を抱くことになる。また、小原保と何度か会ったことのある顔見知り程度の者も「これは小原だ」と感じる。このような小原保と面識のある者たちによる犯人の「電話の声」が似ているという証言が、事件解決への決定打とならずとも一つの手掛かりとなったのである。そして、この事件をきっかけに声紋の研究が進んでいくことになる。[27]

以上のように、一九五〇年代頃から犯人の手掛かりとして「電話の声」が注目される事件が発生しているが、それは四号電話機の普及と時を同じくしている。ということは、推理小説における「電話の声」に関する描写の変化もこの頃から生じつつあったと考えられる。

四　松本清張『声』における犯行動機

四号電話機が普及し始める一九五〇年代頃から犯人の「電話の声」に対する扱いに変化が生じつつあったが、そのような背景を踏まえて同じく一九五〇年代に発表された松本清張『声』（一九五六）の位置付けを行っていく。『声』は「小説公園」一九五六年一〇月号・一一月号に発表されており、既に東京における四号電話機の取り付けは同年四月に完了している。[28]

『声』はその題名通り「声」をめぐって物語が展開されていくが、『声』と同年に類似した筋立てを持つ『顔』という小説がある。『顔』に登場する犯人「ぼく」は「顔」を見られた石岡貞三郎を殺害しようと計画する。

> あの男の存在は、ぼくにとってこの世でたった一つの不安である。この不安を除かぬ限り、ぼくの心は委縮している。彼をどうするかは、すでに決心した。ぼくはとにかく己れの身を守らねばならない。びくびくと怯えないで、存分に自分の野心のために手を振り回したい。[29]

「ぼく」が犯人である手掛かりを持っているのは石岡のみであり、石岡には「ぼく」の「顔」を見られている。「顔」を見られているというのは決定的な手落ちであり、その不安は的中することになる。石岡は映画に出演している「ぼく」の「顔」を見て、「ぼく」が犯人であったことを思い出す。「顔」というのはその持ち主を代表する強い要素を持っていることは明らかであり、「ぼく」が石岡を殺害しようとすることは不自然な行為ではない。加納重文は、『顔』と『声』について次のように指摘している。

> この小説も、職業柄、人の声を聞き分ける能力を持つ電話交換手の女性が、殺人犯の声を記憶していて、そのために殺人集団に拉致されて殺害されるというもので、〝顔〟といい、〝声〟といい、単に殺人の原因となった要素を、小説の素材に利用したに過ぎない。[30]

加納は、「声」は犯行動機の一要素でしかなく『顔』における「顔」と同様であるというように、物語の筋の類似点を指摘している。しかし、重要なのは「顔」を見られるということと同様に、「電話の声」を聞かれるということが犯人にとって殺害の要因となる可能性が示されているということである。

会社の電話交換手をしている高橋朝子は社会部の次長である石川汎に頼まれ、赤星牧雄に電話をかけるのだが、間違って赤星真造の家へ電話を掛けてしまう。その後、赤星真造の妻の政江が自宅で殺害された事件を新聞で知り、朝子は誤って電話した相手が殺人犯であるかもしれないと考え警察に相談をする。

「あなたの聞いたその声は、どんな声でしたか？」

係官は、そうきいた。甲高い声、低い声、中音の声、金属製の声、だみ声、澄んだ声、そういう声の種類に分けて、どれにあたるか、どの要素が強いのかたずねられた[31]。

朝子は、犯人の「電話の声」の特徴に関して詳しく聴取される。それは、「電話の声」が有力な手掛かりになり得ると考えられているからである。だが、その声を言葉で正確に表現することは困難であった。声を聞き分けることができるとはいえ、それは感覚の問題であるので、言葉で上手く説明することは難しい。下手に説明すれば、かえって間違った情報を伝えてしまうことになりかねない。結局、朝子は表現の仕方が分からず、犯人の声に関する有力な手掛かりを提示することはできなかった。

しかし、そのことを新聞は記事として大きく取りあげる。

結局、捜査当局は、朝子から〝太い声〟という単純な証拠を聞いただけで、たいした収穫にはならなかった。

しかし、これは各新聞社の興味を惹いて、「殺人現場から犯人の声、深夜偶然に聞いた電話交換手」といった見出しで、朝子の名前を出して、派手な扱いにした。彼女はしばらくの間、いろいろな人にきかれたり、冷やかされたりした[32]。

警察は犯人の「電話の声」が手掛かりになる可能性を考慮して、朝子に詳しく取り調べを行った。そして、そのことを新聞は「派手な扱い」にして記事を出した。このように、「電話の声」が犯人への手掛かりになる可能性を新聞は示している。

そして、結末において川井は朝子の殺害動機について次のように供述している。

私と浜崎は、三年前、世田谷に起った重役の奥さん殺しの犯人です。あの時、強盗にはいって奥さんに

騒がれて殺したのです。ちょうど、その最中に、電話のベルが鳴りました。あれにはびっくりしました。深夜の、しかも、人を殺したばかりのところですからね。浜崎が電話口に出たのですが、どうやら先方は電話を間違えたらしいので、ほッとしました。ところが、浜崎の奴、やめればよいのに『こちらは火葬場だよ』とかいって、まだからかいたいふうだったので、私が横から、あわてて切りました。が、やはり案の定、それが災いしました。（中略）彼女は交換手特有の耳の記憶で、ちゃんと浜崎の声があの時に聞いた声だと悟りました。私はその様子が見えたものだから、これは生かしておけないと思った。[33]

川井は、浜崎の「電話の声」を聞かれたことが殺害の動機だと述べている。浜崎は電話に出て朝子と会話をするが、川井はそれに対して危険を感じ電話を「横から、あわてて切」った。川井は、「電話の声」から特定される危険性を憂慮しており、浜崎の「電話の声」を聞かれたことを重大な過失だと考え、その後も朝子のことが掲載された記事のことを明瞭に記憶していた。浜崎は不用意に電話に出てしまうが、川井は「電話の声」から露見する恐れを当初から抱いていたのである。実際に朝子は浜崎と電話をすることで過去の事件の犯人であることに気付くことになる。

このように、『声』では「電話の声」が犯人の特定へと繋がる可能性が示されている。ただし、それは朝子が電話交換手であるということとも密接な関連性がある。松本は『声』執筆の題材として自身の経験を次のように述べている。

「声」は、新聞社時代にベテランの交換手がいたことから思いついた。いったい、会社の交換手は長く勤めていると、社員の声をほとんどレシーバーを通して憶えている。社外からかかってくる電話でも、その頻度が多ければ社内の人間と同じように記憶している。極端なのは、もしもし、と云うだけで何百人の社員の声の区別がつくから、職業的に馴らされた耳はこわい。だが、これらはレシーバーを通して聞こえる声なので、果たして生の声も同じにゆくかどうかはわからぬ。[34]

ここで述べられているような電話交換手の能力は、『声』における朝子に受け継がれている。電話交換手の適正として「聴覚の鋭さ[35]」が挙げられるが、もともと聴

力が高い人物の「職業的に馴らされた耳」には驚嘆すべきものがあるのだろう。

しかし、『声』と同年に東京での設置が完了する四号電話機の登場は、『声』のモチーフである電話交換手や「レシーバーを通して聞こえる声」と「生の声」の相違といった事柄を弱めてしまうだろう。四号電話機の音声面での飛躍的向上は新聞などにおいて宣伝されていたが、「電話の声」が肉声に近付く、あるいはそのイメージの影響は免れない。電話交換手でなくとも従来と比べて「電話の声」で相手の区別が容易になり、肉声と電話を通した声との差異も小さくなるからである。これらのモチーフが最も効果を発揮する最後の時期に『声』という作品は発表されたと位置付けることができるのである。

おわりに

一九五〇年代は四号電話機の普及により、推理小説における「電話の声」に対する扱いに変化が生じていく過渡期にあったと考えられる。「電話の声」が肉声に近付くことで、「電話の声」が電話を掛ける者の身体的要素として持つ意味が大きくなっていくため、その描写が変わっていくのである。

四号電話機普及以前の推理小説において、犯人の掛ける「電話の声」は正体不明として扱われることが多い。それによって、電話の受け手は、犯人の不気味さや恐怖心といったものが助長されることになる。しかし、このような「電話の声」の持つ意味は四号電話機普及以後において大きく変化していき、「電話の声」が犯人特定の手掛かりになるのである。

実際の事件に目を向けると、一九五〇年代頃から「電話の声」が注目されるようになっていっている。小松川高校事件や吉展ちゃん誘拐殺人事件では、犯人の「電話の声」が捜査において重要な資料として用いられている。それは、従来の電話機よりも肉声に近い四号電話機の普及と時を同じくしている。個人を識別する際には顔や声が重要な手掛かりとなるので[36]、従来の電話と比較して声の再現性が飛躍的に向上した意味は大きいのである。

そして、四号電話機の普及が進む一九五〇年代に発表された松本清張『声』を考察すると、「電話の声」が犯人の手掛かりになり得ることが示されている。ただし、この作品では電話交換手や肉声と「電話の声」の差異が強調されており、それらを抜きにして考えることはできない。しかし、四号電話機の普及によりそれらのモチーフが弱められてしまうということを踏まえると、この時期がそれらを最大限に活かせる最後の時期であったと考

えられる。

四号電話機の登場による声の明瞭度の向上は、推理小説における「電話の声」の描写に大きな影響を与えていた。それは四号電話機の登場によって、人々にとって「電話の声」から想起されるイメージに変容が生じているということを示しているのである。

注

（1）電話研究における重要なものとして吉見俊哉、若林幹夫らによる『メディアとしての電話』（弘文堂、一九九二年）を挙げることができる。一九七〇年代以降に電話が人々に与えた影響を主眼として置いており、以降の電話研究もこの影響を受けている傾向がある。

（2）日本電信電話公社東京電気通信局（編）『東京の電話』下巻、電気通信協会、一九六四年、八四九、八五八頁。

（3）三浦種敏、山口善司ほか「4号電話機の総合通話性（第1報）」（『通研月報』一九五〇年三月）、一〇五、一〇九頁。

（4）増沢健郎「〝電話声〟追放のかげで――4号電話機開発の苦労――」（『科学朝日』一九六八年一月）、一二一頁。

（5）注2に同じ、三〇二頁。

（6）吉見俊哉、若林幹夫ほか『メディアとしての電話』弘文堂、一九九二年、九―一〇頁。

（7）藤竹暁、水越伸ほか「携帯電話と社会生活」（『現代のエスプリ』二〇〇一年四月）、一二頁。

（8）ミステリ事典編集委員会『ゲームシナリオのためのミステリ事典』ソフトバンククリエイティブ、二〇一二年、一八六頁。

（9）ただし、石原は「作者のミス」だと思われるものも解釈に組み込んだ方が面白い可能性もあることを指摘している（石原千秋『読者はどこにいるのか――書物の中の私たち』河出書房、二〇〇九年、二〇五頁）。

（10）森村誠一は「携帯電話が普及した今日、ミステリー環境を設定する重大な要件の一つである連絡不可能の壁は、いとも簡単に乗り越えられてしまう」（日本推理作家協会（編）『ミステリーの書き方』幻冬舎、二〇一〇年、二八頁）というように、推理小説を執筆する際に最新の機器を無視することは出来ないと言及している。

（11）黒岩涙香『幽霊塔』（『黒岩涙香集』筑摩文庫、二〇〇五年）、一三三頁。

（12）小酒井不木『深夜の電話』（『小酒井不木探偵小説選』論創社、二〇〇四年）、一二八―一二九頁。

（13）江戸川乱歩『悪魔の紋章』（『江戸川乱歩全集』九巻、講談社、一九六九年）、一九六頁。

（14）江戸川乱歩『暗黒星』（『江戸川乱歩全集』一〇巻、講談

社、一九七〇年）、一七頁。

（15）北林透馬『電話の声』（ミステリー文学資料館（編）『「妖奇」傑作選』光文社文庫、二〇〇三年）、一一八頁。

（16）横溝正史『病院坂の首縊りの家――金田一耕助最後の事件――』角川書店、一九七八年、四二九―四三〇頁。

（17）西村京太郎『消えた巨人軍』中公文庫、二〇一四年、一八頁。

（18）注17に同じ、三八一頁。

（19）中村敏行、石原嘉夫ほか「新幹線モデル線用列車無線通話システム」（『日立評論』一九六三年二月）。

（20）泡坂妻夫『ダイヤル7』（『ダイヤル7をまわす時』光文社文庫、一九九〇年）、二二頁。

（21）連城三紀彦『過去からの声』（『夜よ鼠たちのために』宝島社文庫、二〇一四年）、九四頁。

（22）連城三紀彦『夜よ鼠たちのために』宝島社文庫、二〇一四年、一九二―一九三頁。

（23）『朝日新聞』一九五八年八月二九日、朝刊九面。

（24）築山俊昭『無実！李珍宇』三一書房、一九八二年。

（25）『読売新聞』一九五八年九月一日、夕刊五面。

（26）本田靖春『誘拐』ちくま文庫、二〇〇五年、一五一―一五二頁。

（27）一九六九年五月二九日、東京都渋谷区のスナック「マリブ」の放火事件において、初めて声紋が科学的根拠を持った証拠として扱われた（鈴木松美『あの人の声はなぜ魅力的なのか――惹かれる声と声紋の科学――』技術評論社、二〇一一年、二一二―二一三頁）。

（28）注2に同じ、八五八頁。

（29）松本清張『顔』（『松本清張全集』三六巻、文芸春秋、一九七三年）、一七一―一七二頁。

（30）加納重文『松本清張作品研究』和泉書院、二〇〇八年、一七四頁。

（31）松本清張『声』（『松本清張全集』三六巻、文芸春秋、一九七三年）、二三九頁。

（32）注31に同じ、二四〇頁。

（33）注31に同じ、二七一頁。

（34）松本清張「あとがき」（『松本清張全集』三六巻、文芸春秋、一九七三年）、五四四頁。

（35）「会社工場における電話交換手の適性と賃金――電話事務能率化のための一資料――」（『労政時報』一九五三年、三月）、二五頁。

（36）伊藤裕司、高山博ほか「顔と声の関連性の判断：人物の同一性について」（『哲学』、一九九五年一月）、一二四頁。

（くろだ・しょうだい／名古屋大学大学院博士課程後期課程）